



C型肝炎の検査を

受けましょう

肝臓内科 部長

笹田 雄三
ささだ ゆうぞう

1989年にアメリカ合衆国でC型肝炎ウイルスが発見されてから、30年以上が経過しました。C型肝炎ウイルスは、主に血液を介して感染し、人体に感染すると慢性肝炎を起して肝硬変に進行し、肝臓がんを発生させます。

最近のC型肝炎に対する治療薬の進歩はめざましく、経口抗ウイルス薬の8〜12週間の内服により、100%近い方がC型肝炎ウイルスを排除できるようになりました。また、C型肝炎ウイルスを排除することにより肝臓がんの発生を抑えられることが明らかになっていきます。

現在、わが国には100〜150万人のC型肝炎の感染者が存在すると推定されています。しかし、C型肝炎ウイルスに感染してもすぐに症状がみられるわけではありませんので、感染に気付かずに過ごされている方も多くおられます。

C型肝炎ウイルスに感染しているかどうかは、血液検査で分かります。C型肝炎の診断は、まず血液でC型肝炎の抗体を調べます。それが陽性的の場合、ウイルスの一部であるHCV-RNAを検査します。HCV-RNAが陽性的の場合は、C型肝炎ウイルスに感染しており、治療が必要な状態です。なお、HCV-RNAが陰性的の場合は、過去に感染した疑いがありますが、治療の必要はありません。

C型肝炎は、早期に診断しウイルスを排除すれば、ほぼ治癒させることができます。肝臓は沈黙の臓器です。症状がなくても、ぜひ一度検査を受けていただければと思います。

C型肝炎の検査をご希望される方や肝臓に関して不安がある方は、当院の肝疾患相談支援センターにご連絡ください。今後の診療や生活に役立つ情報を提供させていただきます。

vol.82

「次に期待する」人権感覚

ふれあい交流センター センター長 藤田 圭二
ふじた けいじ

2020年のNHK大河ドラマ「麒麟がくる」は、出演者の急遽交代や、新型コロナウイルスのための撮影中止など、さまざまなアクシデントに見舞われました。大河ドラマファンとしては大変残念でしたが、学生時代にお世話になった小和田哲男先生が時代考証をしていらつしやるということで、興味を持って見始めました。

私的な感想を言わせていただくと、「麒麟がくる」は最も夢中になって見た大河ドラマでした。中でも私の心をわしづかみにしたのは「金ヶ崎の退き口」でした。織田信長軍が朝倉義景軍と衝突し、浅井長政の裏切りによって撤退戦をした後のことです。落ち込んでいる信長を明智光秀が「負けたわけではない。無理と分かたら逃げることでも大事」「生きていれば次がある」と勇気づけるシーンには、強く胸を打たれました。もちろん、領地争奪のために戦をし、多くの人々が亡くなった戦国時代の一場面ですから、当然、今の世の中にそのまま当てはめるわけにはいきません。しかし、この「生きていれば次がある」の言葉が私には印象的で、深く考えさせられました。

私たちは、さまざまな困難にぶつかります。大・小、多・少の差はありますが、誰もが壁に突き当たれることはありますし、生きることに絶望してしまうことさえあるかもしれません。そういう時にも「生きてさえいれば、必ずいいことがある」ということがいつも胸にあればと思うのです。

また逆に、そういう壁に突き当たったり、絶望したりしている人たちの人権を、周りの人たちにぜひ大事にしていただきたいという思いがあります。たとえつまずいたり社会に迷惑をかけたりすることがあっても、誰もが人権を認められ、温かい目で見守られ、「次に期待するよ」というメッセージを伝えることができたと思わずにはいられません。「次を生きる権利」を保障されることは素晴らしいことだと思のです。

弱者に優しい社会は、本当の意味で成熟した社会・国家だと思えます。どういう立場の人も、基本的に人間は自由であり平等であるはずですが、他人の失敗を許し、「次に期待する」ことが、私たちの人権感覚を一層磨くことになると信じています。

